

テクノロジーの進歩の功罪： 『フランケンシュタイン』と『プレイヤー・ピアノ』

高 階 悟

I. 近代科学の発達とその役割

カート・ヴォネガット (Kurt Vonnegut, 1922-2007) は、84歳で亡くなるまで創作活動において戦争の不条理を描き続け、科学技術の人類への貢献を問い続けた。ヴォネガットはコーネル大学で化学を専攻したが、第二次世界大戦を体験して復員軍人としてアメリカに帰国してからはシカゴ大学大学院で文化人類学を専攻した。シカゴ大学卒業後、「進歩はわれわれの最も重要な製品です」(Progress Is Our Most Important Product)⁽¹⁾ をスローガンにした電気・電子製品メーカーのジェネラル・エレクトリック社に就職した。しかし、3年後に退職してプロの作家生活に入った。ヴォネガットはテクノロジーの動向に注意をむけて機械と人間の関係を扱った最初の小説『プレイヤー・ピアノ』(Player Piano, 1952) を発表した。その後、ヴォネガットは書評家たちにSF (science fiction) 作家のラベルを貼られた。⁽²⁾ サイエンス・フィクションは空想上の科学技術の発達等を題材にした小説であり、宇宙や未来社会を舞台にしながら繰り返し扱われているテーマは「進歩と破局は不可分である」⁽³⁾ という考え方である。晩年のヴォネガットは世界各地の少数民族に対する歴史上の大量殺戮に言及して「全人類は、いまや遅かれ早かれフランケンシュタインの怪物たちに殺されると思って身をすくめている」⁽⁴⁾ とエッセイで述べている。彼は科学の進歩と人間の関係のさまざまな課題に取り組み、警鐘を鳴らし続けた作家の一人である。

フランケンシュタインとは、イギリスの女流

作家メアリー・シェリー (Mary W. Shelley, 1797-1851) の文学史上最初の本格的なSF小説と称される『フランケンシュタイン』(Frankenstein or The Modern Prometheus, 1818) の主人公の科学者を指している。ヴォネガットはメアリー・シェリーを無制限なテクノロジーの発展を恩恵とする考え方に最も効果的に疑惑を表現した女性として紹介している。小説『フランケンシュタイン』の科学者の運命とヴォネガットの最初のSF小説『プレイヤー・ピアノ』、第4作目の小説『猫のゆりかご』(Cat's Cradle, 1963)、戯曲「不屈の精神」("Fortitude", 1968) を通じて科学やテクノロジーの人類に対する功罪の問題を探ってみたい。これらの作品は科学技術の進歩が人々の生活に及ぼす影響と野心的なフランケンシュタイン・タイプの科学者の長期的な社会的責任の問題を明らかにしている。

では、そもそも科学や近代科学はどのようにして発達したのだろうか。科学 (science) とはラテン語で「知識」を意味する言葉である。近代科学の源はイタリアの天文学者ガリレオ (Galileo Galilei, 1564-1642) やフランスの哲学者デカルト (Rene Descartes, 1596-1650) などが登場した17世紀と言われている。それ以前の時代はギリシアの哲学者アリストテレス (Aristotle, 384-322 B.C.) 的自然哲学に基づいたキリスト教的世界観が、宇宙・人間・自然の出来事を神の仕業 (創造) として説明していた。近代科学が存在しなかった400年前の人々は、それぞれの教会の教えを信じていた。

ユダヤ教の学校では、ユダヤ教の生徒がユダヤ教の本を読み、その本に書かれているいっさいが正しいと確信していた。カトリックの生徒はカトリックの学校へいったが、そこの先生はみなカトリックで、かれらは、自分たちの本にはまちがいがないとまったく確信していた。⁽⁵⁾

ガリレオは月を眺め、望遠鏡を利用して初めて宇宙を観察した結果、今までに信じられてきたアリストテレスの宇宙観・地球を宇宙の中心とする天動説に疑問を抱き、地動説を唱え始めた。しかし、当時のローマ法王パウロ5世を説得することができず、ガリレオは異端審問所に呼び出され「有罪」を宣告され、ローマ教皇庁より地動説（コペルニクス説）の撤回を命じられ、終身刑を言い渡された。この歴史的出来事は、宇宙や身の回りの出来事に対して論理的な説明を追求した新しい科学的知識が教会の権威・伝統的な宗教観と対立して宗教裁判になった典型的な例である。イタリアの修道士ジョルダノ・ブルーノ（Giordano Bruno, 1548–1600）は教会が説く地球中心説に反対し、「宇宙の無限」を主張し、カトリック教会の異端審問所でも自説を曲げず、1600年に異端者として火あぶりの刑に処せられた。⁽⁶⁾ 哲学者であり、数学者であり、物理学者でもあるデカルトは、すべてを疑うことから始めて、数学的な確実性をもって神の仕業を解き明かすための明晰な学問（科学）を築き始めた。デカルトは、哲学の分野では「我思う、故に我あり」の命題に到達し、数学の領域では解析幾何学を発見した。17世紀に生まれた新しい考え方は、古代や中世の絶対的な神の信仰に基づいた世界観や宇宙観から、証明可能で、論理的、客観的、体系的な人間の学問への道を切り開いた。17世紀にはさまざまな分野での大発見や法則が学術雑誌等を通じて公に印刷物で報告され、それに対する大きな反論が起こり、時には修正や大発見が繰り返され、次第に新たな理論や法則に発展していった。近代科学は人々を迷信や頑固な盲信から解放した。ヴォネガットは次のように述べている。

It (science) has found the answers to two of our biggest questions: How did the

Universe begin, and how did we and all other animals get the wonderful bodies we have, with eyes and brains and so on?⁽⁷⁾

しかしながら、近代科学の発展・進歩は宇宙や自然界の真実や法則を追求する過程で、神（創造者）が支配する領域をどんどん狭めることになり、近代的な無神論（atheism）が発展する契機にもなった。⁽⁸⁾ ヴォネガットはエッセイ等で無神論がわが家の祖父伝来の信仰であると述べている。そして、彼は自分たちのコミュニティに奉仕する「普通の良識」^{ディスンズイ}を持ったヒューマニストを自任している。

今日使っているような意味での "science" や職業として科学を研究する人を表す "scientist" の造語が登場したのは19世紀中頃と言われている。⁽⁹⁾ それまでは、ギリシア哲学に基づいた自然哲学または貴金属を変成させたり、不老不死の秘薬「賢者の石」の製造する錬金術（alchemy）が支配的であった。近代科学の源の17世紀から、「科学」が普及する19世紀中頃までの期間に本格的なSF小説『フランケンシュタイン；あるいは現代のプロメテウス』（*Frankenstein or The Modern Prometheus*, 1818）が産業革命後のイギリスに出現した。

II. 『フランケンシュタイン』の三つの誤解と社会的背景

一般に小説『フランケンシュタイン』を話題にする時に三つの誤解に陥りやすいと言われている。三つの誤解を通じて、この小説の背景と現在に語り継がれている科学の進歩に伴う課題を明らかにしたい。第一の誤解はこの小説が男性の作品でなく、十代の女性メアリー・シェリー（Mary W. Shelley, 1797–1851）の処女作であることである。当時の流行のゴシック小説（Gothic novel）を受け継いだ怪奇小説に属するこの作品は、1818年に匿名で出版されたためである。女性の役割は家庭や夫を支えることであった当時の社会規範からすると当然の成り行きであった。1832年に出版された第三版で作者名が初めて明らかにされた。この小説が書かれるようになったいきさつは、1816年夏にジュネー

ブ郊外の湖畔の別荘にイギリスの詩人バイロン (George G. Byron, 1788–1824)、彼の主治医ポリドリ (John Polidori, 1795–1821)、イギリスの詩人シェリー (Percy B. Shelly, 1792–1822)、それに18歳のメアリー・シェリーが集まった時、「怪談を作って競うこと」⁽¹⁰⁾ をバイロンが提案したことである。そこから最初の本格的なSF小説と呼ばれる作品が生まれたのである。その怪奇小説は、妊娠し、出産することつまり人間を造った体験のある女性の私生活、メアリーの交友関係それに当時のイギリスの社会情勢などを反映している。

イギリスでは18世紀後半、植民地からの豊富な原料供給に基づき手工業生産から工場制生産へと急激に発展し、生産力を高める機械化の産業革命 (Industrial Revolution) が始まった。近代科学の発達さまざまな紡績機械の発見と改良をもたらし、イギリスの中・北部の織物工業地帯に農業社会から工業社会への大きな社会構造の変化をもたらした。1811年ノッティンガム周辺で機械化によって失業した労働者または失業を恐れた手工業者の労働運動が起こり、ラダイト (Luddites) たちは機械化や合理化に反対し紡績機械や工場建物などを破壊し始めた。イギリス政府は機械破壊者 (ラダイト) を死罪にする機械破壊禁止法案 (Frame Breaking Act) を議会に提出した。詩人バイロンはその議会で政府の法案に反対の熱弁をふるって労働者の運動を弁護した。しかしながら、1812年に法案は議会を通過し、翌年にはラダイトたちが死刑宣告を受け、数名の労働者が処刑された。ラダイト運動は時には軍隊と衝突し、全国的に機械破壊運動が拡大していった。ロマン主義詩人バイロンはラダイト運動に同情した詩集『ラダイトの歌』 (Song for the Luddites, 1816) を発表した。産業革命の生み出した「怪物」に戦いを挑むラダイトを讃えるバイロンの政治的活動は、詩人シェリーや機械化の拡大に懐疑的な人々などに影響を与えた。⁽¹¹⁾

バイロンの提案から生まれた怪奇小説『フランケンシュタイン』の副題「現代のプロメテウス」 (The Modern Prometheus) は、産業革命後の近代科学 (modern science) の功罪と科学者の複雑な問題を浮き彫りにしている。知恵

者のプロメテウスは天上の火を盗み出して人類にもたらして神の罰を受けたギリシア神話の神である。小説『フランケンシュタイン』で神に罰を受けるのは怪物を作った科学者フランケンシュタインである。科学者フランケンシュタインが作り上げた怪物は「当時の科学技術の象徴」でもある。⁽¹²⁾ この小説は「科学の産物が人間の手を離れて制御不可能となり、人間に害を加えるようになるという寓話」⁽¹³⁾ でもある。

第二の誤解はフランケンシュタインは科学者の名前であり、怪物の名前ではないということである。メアリーの小説『フランケンシュタイン』に刺激されて次々に世界中で映画化、漫画化され続け、その中で醜い怪物をフランケンシュタインと呼ぶことが多くなった。一般には映画等のメディアの印象が強く、吸血鬼、狼男と並べてフランケンシュタインを世界三大怪物とする見方が広まったためである。

メアリーの小説中、厳格に言うところフランケンシュタインは科学者 (scientist) ではなく、中世的な自然哲学 (natural philosophy) の中の錬金術 (alchemy) を学ぶ十代の若者である。フランケンシュタインは17歳の時にジュネーブの大学に行き、近代化学 (modern chemistry) の研究を進めている中年のヴァルトマン教授 (M. Waldman) に偶然に出会い、以下のような運命的な講義を聞き、衝撃を受ける。

The ancient teachers of this science promised impossibilities, and performed nothing. The modern masters promise very little; they know that metals cannot be transmuted, and elixir of life is a chimera. They (modern masters) penetrate into the recesses of nature, and show she works in her hiding-places. They ascend into the heavens: they discovered how blood circulates, and the nature of the air we breathe. They have acquired new and almost unlimited powers; they can command the thunders of heaven, mimic the earthquake, and even mock the invisible world with its own shadows.⁽¹⁴⁾

ヴァルトマン教授は金属を金に変えたり、不老不死の秘薬を製造する中世的な錬金術の時代の終焉を告げ、「近代の達人」(modern masters)による人間や自然の営みの解明や創造への無限の可能性を暗示する。若きフランケンシュタインは錬金術による研究の終わりを自覚し、「科学者」(scientists)が活躍する近代科学への大きな変革の風潮を肌で痛感する。小説『フランケンシュタイン』に"scientists"の用語はなく、「科学者」を意味している原書の用語は"modern masters," "masters of science," "man of science," "modern chemists"である。フランケンシュタインは教授の言葉に励まされ、科学の研究において「新しい道の先駆けとなり、未知のパワーを探求し、創造の最も深い神秘を解明しよう」と決意する。彼はヴァルトマン教授の研究室の実験器具を自由に使える許可を得て、その後生命創造の神秘に関心を抱き、解剖学を学び、死体に生命を吹き込むことができるようになる。2年目の秋、ついにフランケンシュタインは黒い髪、眼、口、四岐の均整のとれた人造人間を作りあげた。が、彼が創造したものは外見的には「破廉恥は怪物」(miserable monster)⁽¹⁵⁾であり、創造者でさえ実験室から逃げ出したくなるような醜い人造人間であった。

彼の「科学者」としての偉業を成し遂げようとする野心は、「怪物」の誕生によって恐怖と不幸の放浪生活に転落する。西ヨーロッパ放浪の後、フランケンシュタインは創造者としての責任を果たすことなく後悔と苦悩の日々を送り、己の破滅をまねくためにこの世に怪物を送りだしたことを悟る。フランケンシュタインは北極海の船上で、息途絶える前に自分をプロメテウスのように永劫の地獄につながれた「大天使」(archangel)⁽¹⁶⁾にたとえている。人造人間は「墮天使」(fallen angel)として描かれている。

小説『フランケンシュタイン』が今日でも話題になるのは、さまざまな分野での科学や科学技術の進歩が著しく、たとえば、遺伝子組み換え食品が一部の人々に「フランケンフード」(Frankenfood)と呼ばれ、遺伝子的特性を複製した人間クローン誕生の実験に取り組む団体が出現するようになり、科学者の長期的な社会的責任や倫理性が問題になる時である。SF小

説の世界では人間とロボットの関係を抱う時「フランケンシュタイン・コンプレックス」⁽¹⁷⁾が問題になる。この言葉は父親と息子の関係から生ずるエディプス・コンプレックス (Oedipus complex) のもじりで、自分の造ったロボット等に殺されるかもしれないという人間のオブセッションを表している。この場合のフランケンシュタインは、怪物ではなくさまざまな発見をし、機器を作り出す人間である。この言葉は無邪気な科学者の野心や好奇心によって生み出された産物、ロボット、新型兵器などの怪物が科学者のコントロールを離れて人類に災害をもたらす可能性があることへの警告でもある。

第三の誤解はフランケンシュタインが造った人造人間が残酷非道であり、見境いなしに人を殺害する悪鬼と見なされていることである。創造者が最初に「破廉恥は怪物」と表現した人造人間は、外見は醜いが、見境もなく人を傷つけることはなく、殺害された人物はすべてフランケンシュタインに関係した人物である。すべての怪物の行為にはそれ相当の理由があり、むしろ怪物は「醜いアヒルの子」のように同情すべき登場人物である。怪物は、「黒々とした髪で、黄ばんだ皮膚」と誕生の場面では描写されている。ヨーロッパ人から差別された黄色人種の風貌をしており、帝国主義的支配者と被支配者というポストコロニアル批評的観点から見直すことができる登場人物でもある。⁽¹⁸⁾

最初の犠牲者は、フランケンシュタインの末弟ウィリアムである。人造人間はジュネーヴ郊外で子供に出会い、手をさしのべるが、子供は金切り声をあげて拒否し、「怪物！醜い化け物！ぼくを食べ、バラバラにする気だろう。人食い鬼。お父さん（アルフォント・フランケンシュタイン）に言いつけてやる」と言う。人造人間はフランケンシュタインの名前を聞き、創造者への憎しみと復讐の念でその子供を絞殺する。フランケンシュタインは人造人間に「女性の伴侶を造る」と約束をするが、怪物がさらに人類に及ぼす危害を考えて実験室での作業を途中で中止する。その後、絶望した怪物によってフランケンシュタインの親友のヘンリーが殺され、許嫁のエリザベスが婚礼の晩に殺害される。

怪物が殺害行為に至ったのは、他の人々のよ

うに公正と正義を求めたにもかかわらず、人々に排斥され、創造者のフランケンシュタインに裏切られたことに対する憎悪や復讐である。怪奇小説『フランケンシュタイン』の悲劇は、生命の神秘に関心を抱いた若き主人公の野心が招いた不幸な出来事であった。人造人間が繰り返しフランケンシュタインに要求したことは創造者としての「義務」の遂行であるが、彼は自分の役割を果たさずに逃げ回り、怪物を北極海まで追いかけて以下の言葉を残して息絶える。

"Seek happiness in tranquillity, and avoid ambition, even if it be only the apparently innocent one of distinguishing yourself in science and discoveries. Yet who do I say? I have myself been blasted in these hopes, yet another may succeed."⁽¹⁹⁾

若いフランケンシュタインは科学や発見で名をあげようという野心を抱き、破滅を招いたことを後悔し、平穏の中に幸福を追求するように言い残す。同時に、他の科学者は彼のように破滅を招くことなく成功を成し遂げられることを期待している。メアリー・シェリーが19世紀に書いたこの小説には産業革命後の文明社会で無垢な科学者が陥りやすい陥穽や近代科学の発達に伴う複雑な功罪を扱っている。メアリー・シェリーが『フランケンシュタイン』の中で展開したさまざまな問題は、神話として現在にも語り継がれている。

Ⅲ. 『プレイヤー・ピアノ』と 機械破壊運動

アメリカ作家ヴォネガットは、小説やエッセイ等で機械破壊主義者の「ラダイト」、「フランケンシュタイン」、メアリー・シェリーについて繰り返し言及し、科学の進歩と人類の破局の狭間の問題や科学者の社会的役割の問題を扱っている。

ヴォネガットの最初のSF長編小説『プレイヤー・ピアノ』は、アメリカの未来社会の中で機械化によって仕事を失った人々や社会の隅に追いやられた人々の機械破壊運動（ネオ・ラダイト）の物語である。ヴォネガットは復員軍人

としてアメリカに帰国してから、シカゴ大学で人類学を学び、ジェネラル・エレクトリック社の広報部で3年間働いた。ヴォネガットはそこで無邪気に働く一流の科学者たちに出会い、科学技術の発展、特に自動制御装置としてのコンピューターの働きに関心をもった。ジェネラル・エレクトリック社で体験したテクノロジーの発達や機械化の普及に対するヴォネガットの反応が、退職後に書いた第一作目のSF小説『プレイヤー・ピアノ』である。ヴォネガットはインタビューで次のように述べている。

This was in 1949 and the guys who were working on it were foreseeing all sorts of machines being run by little boxes and punch cards. *Player Piano* was my response to the implications of having everything run by little boxes.⁽²⁰⁾

『プレイヤー・ピアノ』の舞台は肉体労働の価値をなくした第一次産業革命後、単純な頭脳労働の価値をなくした第二次産業革命後で、人間の思考の価値をなくする機械（コンピューター）が普及した第三次産業革命が進行中の社会である。その平和な未来社会では19世紀のイギリス同様に機械破壊行為防止法（antisabotage laws）が厳しく施行されている。主人公のポール・プロテウス博士（Doctor Paul Proteus）は、エンジニア上がりのイリアム製作所の所長である。プロテウスはギリシア神話に登場する変幻自在の海神であり、神から火を盗んだプロメテウスの末裔であり、『プレイヤー・ピアノ』の主人公のポール・プロテウス博士も変幻自在な役割を演じる。ポールはイリアム市で最高の地位にありながら、コンピューター（EPICAC）の自動制御装置によって自動操作化された管理社会に疑いを抱く。人々の居住地は川をはさんで分断されており、知能指数（IQ）の高い管理者と技術者は北西部に住み、軍隊に入るか道路や住宅の修理の仕事をするだけの民衆は南部地区に住んでいた。ポールは大学時代の友人エド・フィナティ博士（Ed Finnerty）に会い、南部地区の民衆酒場に行き、人間の尊厳（dignity）を回復するために

機械破壊の暴動を組織する救世主を待ち望む人々の声を聞く。ポール自身も「われわれは進歩の名のもとに何か悪いことを犯していないかどうか」⁽²¹⁾を知りたいと思う。

全米産業安全部では工場を破壊し、国家を乗っ取ろうと企てている集団「幽霊シャツ党」(Ghost Shirt Society)の不穏な動きに気づき、ポールに機械破壊者の「幽霊シャツ党」の様子を探り、指導者を逮捕するために敵陣への潜入を要請する。管理者のエリート集団から偶然に飛び出たポールはすがすがしい気持ちになり、「文明のパレードの先頭を行く盲目のドアマンよりも、何もしないほうが良い」⁽²²⁾と思う。ポールは橋を渡って反対側にいる友人のフィナティールと再会し、そこで「幽霊シャツ党」への入会を勧められる。機械破壊者の「幽霊シャツ党」は19世紀の白人支配に立ち上がったインディアンの抵抗運動に由来するものであった。イリアム市の民衆にとっての機械は、インディアンにとっての白人と同じであった。

It (world) had become a white man's world, and Indian ways in a white man's world were irrelevant. It was impossible to hold the old Indians values in the changed world. The only thing they could do in the changed world was to become second-rate white men or wards of white men.⁽²³⁾

ポールは無限にテクノロジーの発達した管理社会において、人間は奴隷のように機械に支配され、オートメーション化された安易な生活に安住していることに気づく。無邪気な科学者は真理を探究し、素晴らしい発見をするが、その発見がその後何に利用され、何が起こるかはあまり気かけない。⁽²⁴⁾ それらの大発見や新しい機器は政治家の夢の実現のためや実業家の利益のために利用されるのである。イリアム市の管理者は、「機械と組織の能率の追求のために」⁽²⁵⁾テクノロジーを利用し、民衆から自由と幸福の追求の権利を奪ったとポールは確信する。ポールは「世界を民衆の手にとりもどすため」に「幽霊シャツ党」に加わり、現体制を変革するための革命運動の指導者に祭り上げられる。イ

ンディアン風のシャツを着た人々は全米各地で蜂起し、市街地の主要な官庁を占拠し、次々に身の回りのありとあらゆる機械を破壊し、自動制御装置の大型コンピューター EPICAC も破壊した。しかし、ポールは民衆が機械を破壊しつくした後、自動販売機の修理を開始し始めたのを見て複雑な気持ちになる。『プレイヤー・ピアノ』ではテクノロジーの功罪のドラマが見事に描かれている。テクノロジーは社会生活において民衆に便利な機械や機器を提供するが、時として人間の尊厳 (dignity) を奪うことがある。

ヴォネガットは真空管のコンピューターが登場した1950年代に、すでに無制限な科学の発展とテクノロジーの普及への疑惑を作品中に表明している。このSF小説中の完全にコンピューター化された未来社会では、コンピューターの真空管が多くなればなるほど組織犯罪、離婚、少年非行、麻薬中毒、アルコール中毒そして自殺が激増していった。⁽²⁶⁾ 20世紀後半より始まった情報革命では、全世界にインターネットが拡大し、携帯電話が全世代へ普及することによって、組織犯罪やテロリズム、少年非行、大麻等の薬物利用、自殺が増加したとも言える。ヴォネガットがこのように科学技術の発展に疑問を持ち始めたのは、電気・電子製品メーカーのジェネラル・エレクトリック社での最先端の科学的進歩の実体験のためであり、またドレスデン爆撃から生き残ってアメリカに復員した時、アメリカが科学的な真実を広島に投下し、多くの民衆を殺したためでもある。日本の科学者小出昭一郎は「核の問題は20世紀の物理学者の負うべき原罪のように思われる」⁽²⁷⁾と述べている。『プレイヤー・ピアノ』の大型コンピューター EPICAC は「戦争の申し子」として描かれており、科学技術は常に戦争に利用される危険性を持っている。ヴォネガットは大気科学者の兄バーニーについて「彼は決してフランケンシュタイン・タイプの科学者ではなく、どんな種類の意識的な破壊装置の研究にもたずさわらなかったし、たずさわろうともしなかった」⁽²⁸⁾と述べている。ヴォネガットは創作活動を通じて、無邪気な科学者の発見や製造された機器、つまりフランケンシュタイン自身または科学者に造ら

れた怪物の人類におよぼす影響について警告を
発している。

ヴォネガットはネオ・ラダイト (neo-Luddites: 大量殺人兵器を破壊せよと主張する人々) の集会に招待され、核利用産業側の巧みに仕上げられた嘘の広報活動を批判している。⁽²⁹⁾ 彼は大量殺人兵器の問題を当事者の「使い方次第」として存在を正当化することなく、殺戮を助長する兵器や機器の存在に抵抗している。また、「ラダイトであり続ける」⁽³⁰⁾ 自分の生活を『タイムクエイク』(Timequake, 1997) の中で紹介している。彼は原稿を手動式タイプライターで打ち、タイプ原稿に万年筆で赤をいれ、タイプ清書を他の女性に依頼するのである。彼はコンピューターやファックスに依存することなく、封筒に原稿を入れて、郵便局に行って切手を購入し、郵便窓口の女性に渡す様子を誇らしげに描いている。

I have had one heck of a good time. Listen:
We are here on Earth to fart around.⁽³¹⁾

IV. フランケンシュタイン・タイプの科学者と メアリー・シェリー

ヴォネガットの第4作目の小説『猫のゆりかご』(Cat's Cradle, 1963) にフランケンシュタイン・タイプの科学者が登場する。『猫のゆりかご』の物語は原子爆弾の父と称される科学者のフィーリニク・ハニカー博士(Dr. Felix Hoenikker)が広島に原爆投下の日に何をしてきたかを探ることから始まるSF小説である。ノーベル物理学賞を受賞した博士には、三人の子供がおり、子供たちや他の科学者の回想から偉大な科学者・ハニカー博士像が明らかになってゆく。博士は真理の追究のための科学研究には熱心であるが、子供と一緒に遊ぶことはなく、息子の一人は父親を「人間にはほとんど興味のない人」⁽³²⁾と語る。ヴォネガットはこのように世間の人間関係に疎いハニカー博士のモデルは、かつて働いていたジェネラル・エレクトリック社の研究室の花形科学者であると彼のエッセイで述べている。⁽³³⁾ 最初の原爆実験がアラモゴードで実施された時、一人の科学者は爆破実

験の成功を目にして "Science has now known sin." と語りかけた。ハニカー博士は "What is sin?"⁽³⁴⁾ と言った。博士のように「純粹に研究に専念する」タイプの科学者の研究所へは、アメリカを無敵国家にするためのアイデアや武器製造のためにたびたび軍の将校が訪問していた。ハニカー博士は海兵隊の将軍の要請で地球を一瞬にして破滅させることのできる科学物質(アイス・ナイン)を発明し、三人の子供たちに託して亡くなる。

ヴォネガットの戯曲「不屈の精神」("Fortitude", 1968)の主人公はノバート・フランケンシュタイン博士(Dr. Norbert Frankenstein)である。メアリー・シェリーの19世紀の怪奇小説『フランケンシュタイン』の現代版とも言える作品である。⁽³⁵⁾ 両フランケンシュタインの共通点は、若い時に母親を亡くし、医学の分野に関心を抱き、天才的な才能を発揮し、そして最先端の科学技術を用いて死体または死体に近い人間を甦らせた。65歳独身のノバート・フランケンシュタイン博士は癌で亡くなった母親を救えなかったことを悔やみ、医学生の頃に機械工学、電子工学、化学工学を学び、死を克服する医療技術を体得する。フランケンシュタイン博士が働いている病院へ当時64歳の億万長者の未亡人シルビアがまったく絶望的な状態で運び込まれてきた。他の医師は手のほどこしようがないと諦めたが、フランケンシュタインは自分が治療すると言って、母親に似た未亡人シルビアの生命を救った。その後、未亡人シルビアは78回もの手術に不屈の精神で耐え、他の人間から移植した大きな部屋いっぱいの心臓、肝臓、肺などの器官と機械の制御装置によって100歳まで長生きしていた。フランケンシュタイン博士は50歳までの生存を保証したが、シルビア夫人が小さな火花を散らして願っていることは "For the love of God - somebody get me out of here!"⁽³⁶⁾ であり、死の祝福であった。シルビア夫人は密かに銃を手に入れて自殺を試みたが、自殺ができないようにプログラムされていた。シルビア夫人はフランケンシュタイン博士に向けて銃を発砲した。

フランケンシュタイン博士はお金に糸目をつけず、最新科学の治療法で母親に似た女性の生

命の維持に熱心であったが、その患者の感情をまったく理解できず、また理解しようとしなかった。フランケンシュタイン博士が野心的に最新医療の名の下に処置している様子は、科学に疎い美容師の眼からすると「死んだ女性の頭をたくさん機械につなげ、一日中それをいじくりまわしているだけ」⁽³⁶⁾ であり、ここを見学のために立ち寄った医師が最新医療の現場を見て感じたのは「恐怖感」(horror)⁽³⁷⁾ であった。

ヴォネガットが70歳代の晩年に書いたエッセイ『キヴォーキアン先生、あなたに神のお恵みを』(God Bless You, Dr. Kevorkian, 1999)にはメアリー・シェリーが登場する。ヴォネガットが来世のレポーターとして21人の歴史上または架空の人物にインタビューをする形式になっている。文学関係の歴史上の作家としてはイギリスの劇作家ウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare)、全米ヒューマニスト協会名誉会長のアイザック・アシモフ(Issac Asimov)、そしてメアリー・シェリーと対談をしている。ヴォネガットはメアリー・シェリーを「古今を通じて最も先見性と影響力のあるSF小説を書いた」⁽³⁸⁾ 女性として紹介し、「アメリカが武器を持っていない広島と長崎の男女や子供たちの頭上に原子爆弾を投下したこと」について意見を求めている。彼女は彼女の両親や詩人シェリーやバイロンについて語るだけである。人々がフランケンシュタインの名前を怪物の名前と間違える無知(ignorant)について、メアリー・シェリーは次のように答えている。

"That's not so ignorant after all. There are two monsters in my story, not one. Ant one of them, the scientist, is indeed named Frankenstein."⁽³⁹⁾

メアリーの小説『フランケンシュタイン』の中で、若い医学生がフランケンシュタインが造った人造人間は怪物であり、ヴォネガットは若い医学生そのものも怪物であったと述べている。怪物とはどのような人間なのだろうか。怪物とは人並み外れた才能を持ち、楽観的に考えると世紀の大発見をして人類を進歩の道に導く人物かもしれない、悲観的に考えると大量虐殺の兵

器や人間関係を破壊する機器を発明して人類を破滅の道に導く科学者かもしれない。ヴォネガットは初期の『プレイヤー・ピアノ』の頃から無邪気な科学者による無限のテクノロジーの進歩に疑念を抱きながらヒューマニストとして創作活動や戦争への抵抗運動を続け、以下のような地球の墓碑銘を残して84歳でこの世を去った。

「われわれはこの惑星を救う気があれば救えたのに、しかし、われわれはいまいまいほど低俗であった」⁽⁴⁰⁾

注

- (1) Jerome Klinkowitz ed., *Vonnegut in America*, (Delacorte Press/ Seymour Lawrence, 1977) p.16
- (2) Kurt Vonnegut, *Wampers, Forma & Granfaloon*, (Dell, 1974) p.1
- (3) 廣野由里子『批判理論入門：フランケンシュタイン解剖講義』(中央新書, 2005) p.133
- (4) Kurt Vonnegut, *Fates Worse Than Death* (G.P. Putnam's Sons, 1991) p.119
- (5) ヨセフ・アガシ, 立花希一訳『科学の大発見はなぜ生まれたか』(Blue Backs, 2002) p. 21
- (6) ヨセフ・アガシ, 立花希一訳『科学の大発見はなぜ生まれたか』p.25
- (7) Kurt Vonnegut, *Armageddon in Retrospect*, (Jonathan Cape, 2008) p.20
- (8) John Henry, *The Scientific Revolution and the Origins of Modern Science*, (Palgrave Macmillan, 2008) p.96
- (9) Sharon Ruston ed., *Literature and Science*, (D.S. Brewer, 2008) p.2
- (10) 久守和子/中川僚子編『フランケンシュタイン』(ミネルヴァ書房, 2006) p.7
- (11) 「ラッドライト運動」、Wikipedia
- (12) Emily Sunstein, *Mary Shelly: Romance and Reality*, (John Hopkins Uni. Press, 1991)
- (13) 久守和子/中川僚子編『フランケンシュタイン』(ミネルヴァ書房, 2006) p.133
- (14) Mary W. Shelley, *Frankenstein or The Modern Prometheus*, (Penguin Classics, 2003) p.49
- (15) Ibid., p.59

- (16) Ibid., p.214
- (17) 森下弓子訳『フランケンシュタイン』（創元推理文庫, 2006）p.318
- (18) 廣野由里子『批判理論入門：フランケンシュタイン解剖講義』（中央新書, 2005）p.215
- (19) Mary W. Shelley, *Frankenstein or The Modern Prometheus*, p.220
- (20) Kurt Vonnegut, *Wampeters, Foma & Granfalloon*, (Dell, 1974) p.261
- (21) Kurt Vonnegut, *Player Piano*, (Dell, 1980) p.130
- (22) Ibid., p.227
- (23) Ibid., p.273
- (24) Kurt Vonnegut, *Wampeters, Foma & Granfalloon*, (Dell, 1974) p.266
- (25) Kurt Vonnegut, *Player Piano*, (Dell, 1980) p.296
- (26) Ibid., p.58
- (27) 小出昭一郎 朝日新聞 11月23日, 2008
- (28) Kurt Vonnegut, *Timequake*, (G. P. Putnam's Sons, 1997) p.176
- (29) Kurt Vonnegut, *Palm Sunday*, (Delacorte Press, 1981) p.70
- (30) Kurt Vonnegut, *Timequake*, (G. P. Putnam's Sons, 1997) p.186
- (31) Ibid., p.191
- (32) Kurt Vonnegut, *Cat's Cradle*, (Delta Book, 1963) p.22
- (33) Kurt Vonnegut, *Palm Sunday*, (Delacorte Press, 1981) p.102
- (34) Kurt Vonnegut, *Cat's Cradle*, (Delta Book, 1963) p.25
- (35) Susan Farrell, *Critical Companion to Kurt Vonnegut*, (Facts on File, 2008) p.137
- (36) Kurt Vonnegut, "Fortitude", *Wampeters, Foma & Granfalloon*, (Dell, 1974) p.60
- (37) Ibid., p.46
- (38) Kurt Vonnegut, *God Bless You, Dr. Kevorkian*, (Washington Square Press, 1999) p.64
- (39) Ibid., p.65
- (40) Kurt Vonnegut, *Hocus Pocus*, (G. P. Putnam's Sons, 1990) p.140